

テレジン収容所の若い画家たち展

2018年6月7日(木)～6月12日(火)

八木橋百貨店 8階カトリアホール

※最終日は午後5時にて終了。

入場無料



ルース・ハイノヴァー
1934.2.19生まれ 1944.10.23 アウシュヴィッツへ



なり、やがて退職をします。

学生時代から、将来は文章を書く仕事をしたいと思っていましたが、そのころに広告文案を書かないかと誘われ、デザイン会社に入り、コピーライターの仕事をはじめました。社内報なども頼まれ、ルポルタージュやエッセイを発表する機会も増えたのですが、夫の転勤で大阪へ移住。そこで友人と「住んでいるまちをもっと知ろう」とタウン誌の発行をして

いたら、埼玉に戻ることになり、その後、新聞・雑誌に書きながら、浦和家庭裁判所で調停委員もしていました。

子どもたちの 絵との出会い

1989年2月のことでした。私は次女といっしょに当時のチェコスロバキアの首都であるプラハを観光していました。このとき、たまたまシナゴーク(ユダヤ教の会堂)に入りました。このなかに子どもたちの絵が20枚ほど展示されていました。私はこのときなにも知らずに、ただ子どもたちが描いた遊園地や学校の絵だと思っていたのですが、そのなかに首つりを描いた絵があったのです。「なにかおかしい」と感じ、パンフレットを買って読んでみると、それはテレジン収容所にいた子どもたちが、厳しい労働と飢えと寒さ、そして親から離された淋しさ、死の不安などのなかで、希望を見いだすために描いた絵であることを知りました。

テレジンはプラハの北、約60キロメー

トルに位置する都市小さな街で、その収容所はアウシュヴィッツへの中継地でした。当時ここには、約1万5000人ものユダヤ人の子どもたちが収容されていました。そのなかで、大人たちが命がけで教室を開きました。ユダヤ人女性画家のフリードル・ディッカーさんは、絵の先生でした。画用紙も手に入らないので、ドイツ兵が捨てた書類や箱など、書けるものをなんでも利用しました。ディッカーは「明日はきつといい日が来るわ。希望を捨ててはだめ。楽しかったあの日の思い出を絵に描いてみよう」と呼びかけたそうです。

子どもたちは遊園地、公園、サーカス、クリスマスなど、それぞれが楽しかった記憶をたどりながら絵を描きました。絵のなかにはチョウを描いたものがありますが、野原を飛ぶチョウは収容所の壁を越えて自由に移動できる象徴であり、子どもたちの憧れだったのだと思います。この子どもたちの多くは、やがてアウシュヴィッツの強制収容所に送られ、生き残ったのは、わずか100人ほどだったといえます。

絵の巡回展開く

私はこの事実を知り、本当に衝撃を受けました。そして「日本でこの絵の展覧

会はできないだろうか」と考えました。帰国後、なんのつてもないままでしたが、在日チエコスロバキア大使館を訪れ、交渉しました。大使館はもちろん、本国の方にも趣旨に賛同していただくことができ、収容所で発見された約4000枚の絵のうち、150枚の写真パネルと6枚の原画をお借りすることができました。

私はこの絵を日本中の人に観てもらいたいと考え、1991年に全国23カ所で巡回展を開きました。その最初となったのが熊谷市の八木橋百貨店でした。日本での開催は、イスラエル、イタリアに次いで3番目のことでした。

1年間の巡回展では、8万人以上の人が見に来て、「感動した」「忘れられない」とすごい反響で、新聞の全国版で紹介され、テレビ番組もつくられました。はじめは1年で終わらせるつもりで原画も返却したのですが、「まだ見ていない」「うちの街でやりたい」などの反響が大きく、以来、27年も続き、小規模な展覧も含めると200回以上も続いています。今年6月には、北九州市の門司で開催しました。北九州・福岡はすでに何度もやっているのですが、今回も1700人以上の人が来て、感激続きでした。中学時代に見て感想文を書いた子が、大学生になって、また来てくれたり、引きこもりだったころに見て感動し、その後、がんばって幼稚園の先生なったという人と会ったり、うれしかったです。

絵は子どもたちの生きた証であり、願い、怒り、悲しみなどのメッセージが込められています。だから見た人の心を打



つし、絵から子どもたちの声が聞こえるような気がしてくるのです。

私はテレジンで生き残った人を探し出し、話を聞くことができました。生き残った人に話を聞いた日は本当につらかったです。そのうちの4人とは20年以上にわたって交流を続けています。そのなかで感じたのは、戦争には終わりが無いということ。彼らがいまも傷を残しているだけでなく、直接的な体験をしていない子ども世代にも精神的ダメージが受け継がれています。「ホロコースト・シ



ンドルーム」と呼ばれていますが、いまでも苦しみは続いています。ですから戦争はいちばん大きな罪なのです。

テレジンの絵と出会い、これまで展示会を開くために無我夢中ががんばってきました。年齢を重ね、やめたいと思うことも何度もありましたが、戦争の真実を知れば知るほど、次の世代に伝えねばと思いが強くなってきます。

教員に 期待すること

今回、熊谷八木橋百貨店の御好意により展示会を開くことができました。できれば埼玉県内の各地で開催したいと考えています。会場や予算の面などいろいろな問題もあるため、すぐには歩み出せませんが、考えていくつもりです。

熊谷で開催中に、川口の高校の先生が見学にいらしてくださいました。生徒にも伝えたいと、写真を撮って帰りました。その後、3クラス、120人の生徒さんが先生の話を聞き、写真を見て書いた感想を読ませていただきました。若い

感性で受け止めてくれたことが分かり、うれしく思いました。テレジンの悲劇を語り継ぐために、これまで私は「テレジンの小さな画家たち」「フリードル先生とテレジンの子どもたち」「子どもたちのアウシュヴィッツ」などの本を書き、出版してきました。展示会に來られなかった人もぜひ読んで戦争の真実を知っていただきたいと思っています。とくに先生方には、この本を教材にして授業に活かしてほしいと思っています。収容所で、一度は絶望的になっていた子どもたちが笑顔を取り戻し、明日への希望を描くことができた―これが教育の原点だと思います。それが、あの過酷な状況のなかでもできたことを知っていただきたいのです。

「テレジンの小さな画家たち」は小学校6年の国語の教科書に載っています。「学校図書」の教科書なので残念ながら埼玉の学校では採用されていませんが、教科書なので、利用できると思います。

これからも多くの人に絵を観ていただきたいと思えます。とくに若い人。家族がいっしょに観て、親子で話し合っていたら最高にうれしいです。